

新潟大学医学部整形外科学教室

同窓会誌



No.58 2010

新潟医療福祉大学との13年

その1. 開学の頃

高橋 榮 明

1. はじめに

私は平成22年3月末日をもって9年間勤めた新潟医療福祉大学の学長職を退任した。新潟大学医学部在任中、文部省からの新大学設立に関する委員としての兼任発令を頂いていた2年間、平成11年3月に新潟大学医学部を辞して新大学準備財団に勤務した2年間、合計13年間を新潟医療福祉大学と関わりあいを持った。

その期間には、同窓会の皆様にご直接的、間接的に多大のご支援をいただいたことが思い出される。そのご支援に感謝しつつ振り返ってみよう。

2. 専門職教育との関わりあい

1960年代後半（昭和40年代）に理学療法士、作業療法士の医療専門職が、国の制度として次々と作られた。その際、新潟大学の理学療法をしていた人たちに対して新しい資格取得のための講習会が開かれ、私は講師を務めた。1970年から80年代について犀潟にできた犀潟リハビリテーション学院に非常勤講師として整形外科の講義を一部担当した。

1990年代になり新潟大学医療短期大学の4年制化の気運が高まってきた。当時の武藤医学部長に、田島達也前教授時代からの懸案であった新潟大学に理学療法学科、作業療法学科新設の希望を聞かれた。私はその必要性を感じていたので、即座に新設の希望を伝えた。その後、医療技術短期大学の参事責任者であった同級生のS君、その後引き継いだ同じくS先生のお世話になって、その2学科の新設の実現に努め

た。そして何人かの教員候補者も集めたが、1996年頃になって文部省は当時あった学科のみを昇格させるが、新しく学科を新設することはしないことがわかった。そのため、教員候補者の皆さんに一度集まっていたいただき状況説明の上、その計画を断念しなければならなかった。

3. 新しい出会い

その数ヵ月後、新潟総合学園グループの池田弘理事長が整形外科教室にお見えになった。そして国立大学でできないなら、地元の要請があるので是非、私立で4年制大学を設置したいので、協力を求められた。いろいろ考えて、調査した上、それをひきうけることにした。それは1997年3月25日のことであった。同窓のO君の推薦が池田氏に伝わり、この訪問が実現したと、数年後に知った。その後1998年度の4月から1999年3月までは、医学部の教授職を定年で辞する最後の年に当たり、多数の教室員のいろいろな研究論文のまとめの指導と同時並行でこの企画を進行させねばならなかったので悪夢のような1年であった。

萩荘です。

4. 新大学の人材確保

この大学に関して人事を任されたので、あらゆる人脈を通じて良い教員を出来る限り、探した。理学については理学療法士協会に頼んで新進気鋭のK先生が学科長に来て下さることになった。東京で面接し、さらに途中で、新潟に来て頂くために清瀬にお問い合わせに行った。作業療法学科の教員を集めることは困難を極め、適任

者がいなかったのである。

医短の参事だったS先生の高校時代の同級生であったW先生をその前年に制度として確立した言語聴覚士を育成する言語聴覚学科長として、ご推薦いただいた。それで私からお願いしてお引き受けいただいた。

医療と福祉との連携を人事における重要な課題と考えていた。そのため福祉分野の人事が非常に大切であり、当時兵庫医科大学の教授であり、デトロイト時代のテニス仲間であったS先生にお願いしてその事情を説明することになった。お会いする場所は伊丹空港のレストランということにした。そのお伺いする日には新潟は大雪になり、4時間空港が閉鎖され約束の時間に遅れてしまった。たぶん先生はもういないだろうと恐る恐る伊丹空港のレストランに行ったら、同じS先生と一緒に二人で待っていてくださって、4時間経って新潟医療福祉大学の社会福祉学科の人事構成の推薦はもう既に出来上がっていた。それでこの推薦されたY先生を東洋大学の白山キャンパスにお願いにお伺いした結果、そのY先生は東洋大学の定年1年前に来てくださること、同僚のS先生も定年後に来ていただけることになった。

医療と福祉の連携を考える場合に、その要となるのが「食べること」すなわち、「栄養」である。それで管理栄養士を育成する健康栄養学科については、かねてから共同研究をしていた日本女子大学のE先生にお願いした。良い人材を紹介していただき、東京でM先生にお会いした学科長をお願いした。さらに仙台まで行ってお願いしたS先生は、現学科長である。このほか国際的に活躍していたA先生のお弟子さんである活動的なM先生が推薦によってきてくださったので非常に嬉しいかぎりであった。

5. 準備財団時代

新潟大学医学部を1999年3月に辞して、新大

学の教員を継続的に採した。その他教員は学科長予定者にお任せした。1999年の4月から2年間準備財団が設立されて、旧弁天橋病院の4階に事務局を構え、そしてその1室を私は使っていたのである。準備財団の2年目には各学科の準備委員が集まって5人の優秀な教員がそこで大学の設立の準備をした。カリキュラム、備品、図書館の書籍などいろんなことが必要である。教員研修ファカルティデヴェロップメントとしては2000年8月にイタリア軒で行い、そして開学時の2001年の4月に新任教員研修を行った。

このような素晴らしい人材に集まっていたが、最後まで難航したのがOT学科であった。最初、断られたのであるが、あくまでも本学の設立の趣旨を述べて来ていただいたY先生はアメリカで長年の経験があり同時に看護師の資格も持っている非常に有能な公明な方であった。

大学の教員は人材として宝である。優秀な教員がいることが大学の基盤であり、それが良い教育につながることを痛感し、それが大学の発展に繋がることは明白である。その人たちを大切に、定着していただくために、まず新潟を知っていただきたいと考えた。新潟県、新潟市が刊行している特色を示す印刷物を多数取り寄せて送り、新潟の自然、産物を紹介し、薪金など新潟の文化に親しんでいただく機会を設定することに努めた。

6. 開学の理念

新しい大学の設立を申請する時に、大学の理念を明文化する必要がある、私は諸大学のそのような大学の理念を調べたが事務担当してきた有能な、IさんとKさんがいろいろ準備に当たってくれた。しかし、100語から200語の文章の理念は、それがいかに立派でも、学生は覚え

ることないだろうと考えた。それはそれとして、申請用に作成し、学生、教職員、保護者など誰でも聞けば、すぐ覚えられる内容を表す短いフレーズを考え、それを理念として示すことが良いのではないかと私は考えた。

当時、私は1970年代の終わりのころから行ってきていた骨盤腫瘍の手術的治療の成績について、1990年代後半は深い反省の時期にあった。「生命の長さ」と「生命の質」について考え、患者さんの生命の質、Quality of Life, QOLを尊重することが、最も大切だと考えるようになっていた。その頃、骨粗鬆症のQOL評価質問表の作成にも着手していた。河野左宙先生以来のご縁で、聖隷浜松病院に整形外科研修医を派遣していたので、当時、オフト監督のもと、最強の「ジュビロ磐田」が新潟に試合に来ると、試合があるサッカーグラウンドとなった陸上競技場に必ず招待されて、応援に行った。最初は当然、ジュビロを応援したが、その後、アルビレックスと呼ばれるようになった新潟のチームを、次第に応援するようになった。そのときの両チームのサポーターの素晴らしい応援、その情熱に深い感動を覚えた。

開学の理念を示すキャッチフレーズを基本的には日本語でつくりたいと考えていたが、この患者のQOLとそれを支援する専門職の意味で「QOLサポーター」という言葉をつくった。そして「優れたQOLサポーターの育成」が新大学の使命「Mission」であるとして掲げた。

7. 連携教育の発端

医療と福祉との連携が患者の生命を救うために、絶対に必要であるという考えは、1997年頃の経験に基づく。大学付属病院整形外科において、生後3か月の男児の上腕骨骨折を治療したが、その2週後に起こった父親による多発性肋骨骨折による乳児虐待死を防止できなかった。このことにより医療と福祉との連携の必要性を

痛切に感じた。この経験は、その後の新大学カリキュラム作成上、私に大きな影響を与え、連携教育に対する私への動機付けになった大きな事件であった。

8. 新大学のカリキュラム

高校から大学生活への順調な移行を支援する意味で、1年次前期セメスターに実施される「基礎ゼミⅠ」は同じ学科の10名以下の学生に1名の教員アドバイザーを付けた週1回のホームルームであった。

医療と福祉とを連携させる教育を確実にするために、カリキュラム上、「基礎ゼミⅡ」との授業科目を1年次後期に作った。教員をアドバイザーとして、これは各学科学生混成チームでいろいろな学習、調査研究を共同作業、チームアプローチで行う授業科目である。教員採用に際しては、この授業科目を担当することが採用の時の条件としたのであった。

9. 新大学のシンボリックな建物

新しい建物には、大学の教育理念を示すシンボリックなものを欲しいと考えた。それはチーム医療を行う本学の5専門職が、「生命」支えることを、示す建物であって欲しかった。大学の建物に教育理念をシンボルとして入れてほしいという内容の手紙を池田理事長と、建築を担当した会社社長宛てに送って、依頼した。最初の設計図で丸みのある建物であった図書館は、私のアイデアを取り入れていただき、少し違っただけではいたが、正方形の建物本体と5専門職を示す5角錐の図書館棟の屋根で実現した。その考えを採用してくださったのは、大きな感激であった。その屋根の最上部は硝子張り点灯ができるようになっている。私はpenta roofと名付け、生命を5つの学科、5つの専門職が支えるという象徴的な建物とすることができた。4年後、学科数が増えたときに、これが問題となっ

た。『自分のことをやはり自分で決めること。自らの人生設計をする』というので、「夢」を持つことは大切なことである。そして開学の1週間から10日前に、私の名前で直接、全入学者に対して「私の夢」という600から800字のレポートを提出するよう要請した。それは本学に在学している4年間学内そして学外でどのように生きたいか。そして卒業後にそれぞれの学生がどのような夢を持つかということの書いてほしいと要請した。それを以後、9年間全部目を通して私が賛同するような内容のレポートを部分的に、6月の「私の夢」発表会に際して私から披露するということを実践した。

10. 第1回入学式

開学時の第1回入学式の式辞を考えていた時に、2001年1月24日NHKで桜並木の放送があった。それはその地域の交番に勤務している警官が、朝、交番に立っていて、通って行く学校の生徒あるいは通行人に朝の挨拶をするという番組であった。その地域はそのような警察の活動によって非常に犯罪も少ない、学校も授業崩壊などないような非常に良い地域で、挨拶の大切さというのが非常に強調されていた。私はこれは非常にいいアイデアだと思って第1回の入学式の式辞には、コミュニケーションの第1歩は挨拶であるということ述べた。これを実践して自分から挨拶することを全学生に入学時に申し上げ、その後の入学式時には必ずそのことを言って教職員に協力を求めて維持に努めたのであった。

『自分のことをやはり自分で決めること。自らの人生設計をする』というので、「夢」を持つことは大切なことである。そして開学の1週間から10日前に、私の名前で直接、全入学者に対して「私の夢」という600から800字のレポートを提出するよう要請した。それは本学に在学している4年間学内そして学外でどのように生きたいか。そして卒業後にそれぞれの学生がどのような夢を持つかということの書いてほしいと要請した。それを以後、9年間全部目を通して私が賛同するような内容のレポートを部分的に、6月の「私の夢」発表会に際して私から披露するということを実践した。

開学後の発展状況については、次回、述べたい。

(本項が同窓会誌のため、多数の方のお名前はイニシャルのみとさせていただきます)